

第1日 5月19日(土)

シンポジウム I (14:30~17:30) A会場(12号館5階502教室)

「模倣」概念再考 —ミメシス的なものの創造的契機について

Wider die Gleichsetzung von *mimesis* und *imitatio*.

Zum kreativen Moment des Mimetischen

司会：河野 英二

ミメシス(模倣)の問題は、ギリシア以来長らく芸術の領域において議論の対象であったが、同時に、言語習得、儀礼、擬態、生物進化などの関連から多様な学術分野、コンテキストの中で考察されてきた。例えば近年、教育哲学者のクリストフ・ヴルフは、フーコーの人間中心主義批判を踏まえた「歴史的教育人間学」を構想する際に、人間の特性としての模倣に焦点を当て、この概念を人間論的な観点とともに多角的な考察の対象としている。

一方、ゲルマニスティク、特に文学理論の系譜上で模倣の概念は、啓蒙主義詩学の中で古代受容と自然記述の両文脈で際立った役割を果たしていることが確認されるが、スイス派の文学理論やヴィンケルマンらの古典主義を経たのち、疾風怒濤、ロマン主義の時期に至るまでに、作品創出の方法としての模倣はその役割を急速に失っていくように見える。また、自由意志や人権・個性の尊重、メディア環境の変化、知的所有権の法制化といった近代化の流れとともに模倣やコピーの概念は、一般的にはいっそう負のニュアンスを帯びることになったと言えるだろう。実際、ミメシスの問題は、ベンヤミンやアドルノらの思想の中に重要なテーマとして浮上するものの、模倣の概念がロマン主義以降の芸術や詩学と積極的に関係づけられることは、ルカーチやガダマーらの例外があるにしても多くはない。こうした状況の中でゲルマニスティクの観点から模倣の概念を再考し、その歴史的位置づけをあらためておこなう時期が来ているのではないか。

上記の問題意識を出発点として構想された本シンポジウムで、各発表者がロマン主義以降の思想や事象を扱うことには理由がある。昨今の模倣概念再検討の先鞭をつけたと言えるヴルフがグンター・ゲバウアーとともに執筆した『ミメシス』の中では、プラトンから現代までの詩学・芸術論にある模倣の概念

が系譜学的に論じられているにもかかわらず、ロマン主義詩学と模倣との関連の分析がすっかり抜け落ちている。この欠落は古くはアウエルバッハに始まり、2006年のポトルスキーにいたるまで、多くの系譜学的ミメシス論においても同様であり、ロマン主義の芸術理論が模倣の観点から積極的に捉えられることは極めて少ない。ここで我々が提示したい一つの仮説は、啓蒙主義からロマン主義への移行において、模倣は芸術理論の中から消失したのではなく、そこには模倣の概念と方法の深化と拡大が生じていた、というものである。無論、こうした仮説に一定の根拠を与えるためには十分な検証を必要とするが、本シンポジウムではこの問題を検討する出発点として、五人の発表者が、ロマン主義以降の詩学や演技論、パフォーマンス、ジェンダー、映画の観点から、模倣の概念とそれをめぐる事象を考察し、聴講者の方々と問題意識を共有することが目指される。

1. 「自由な芸術模倣における夢」

— ヘルダーリンの後期抒情詩における自然「模倣」について

小野寺 賢一

狭義の抒情詩は詩的主体の思考や心情を直接的に表出する技術であるとみなされるが、その表現はしばしば自然描写のかたちをとる。したがって詩において描き出される自然は詩的主体の内面の「模倣」であるといえる。しかし詩的主体とはそもそも、作品において構成される虚構的存在である。読者は計算された対象描写を通じて、自然現象や事物と詩的主体との間に何らかの照応関係を認め、それによって対象描写のなかに描写主体を「発見」するのである。すなわち、詩的主体とは、描き出された自然の「模倣」として、読者によって事後的に発見される仮構物にほかならない。

以上の意味に限定して再定義すれば、抒情詩とは、自らの思考や心情の「模倣」として自然を描写する詩的主体を、自然描写の「模倣」として提示する技術であるといえよう。そこに原像はなく、あるのは二つの像の相互的な模倣連関である。この関係を読者が認めることによって、テキストは初めて「抒情詩」として立ち上がってくるのである。

本発表はフリードリヒ・ヘルダーリンの頌歌『ガニューメート』から、詩的主体と自然描写との相互的模倣連関を読み取る試みである。そして最終的には、

彼が『没落する祖国…』において「自由な芸術模倣」と呼ぶものが、この相互的模写連関を構成するための技術を意味しうることが明らかになるだろう。

2. 「演技」と「批評」

— フリードリヒ・シュレーゲルの詩学における模倣のモチーフについて —

胡屋 武志

啓蒙主義詩学の中で技法の適用や外面の模写を意味していた模倣は、古典主義を経てロマン主義に至る過程でその意味内容を、対象全体の有機的構造や内的法則の受容へと変容させる。後者の模倣概念は初期シュレーゲルの古代模倣構想の中で大きな役割を果たしていたが、この模倣のモチーフはのちの彼のロマン主義詩学の中でも機能し続ける。本発表の目的は、これまでメンネマイア一らが指摘していたこの連続性をさらに掘り下げ、シュレーゲル詩学における模倣と批評の関連を、彼が用いる Mimik 「演技」「物真似」や Mimus 「俳優」「芝居」の語とともに考察することである。

シュレーゲルが批評と演技・物真似とを同一視する理由は、批評における記述が身体的な模倣表現と類似していることだけではない。一般に、演技・物真似は、ある人格が別の人格へと内的・外的に変成することで可能となる表現行為を表わす。このとき主体は、舞台上の俳優のように、別人格になると同時に別人格を演じる彼自身であるという二重的な状態を生きている。シュレーゲルが「イロニー」や「自己限定」、「超越論的道化性」等の語によって主題化するはこの二重性である。さらに彼は批評＝演技の問題を、模倣行為そのものだけでなく、模倣が可能となる主体の条件（俳優的身体性）の観点からも探求するが、このことと「エンチュクロペディー」なる形象との関連についても考察される。

3. 「私はざわめきが歌い続ける貝殻」

— 諷刺家カール・クラウスにおけるミメーシス問題 —

河野 英二

諷刺家カール・クラウスが雑誌『ファッケル』と朗読会というふたつの個人メディアを通じて展開した活動は、三つの点で「ミメーシスの復権」を特徴と

していた。第一に、新聞の文章を引用＝模倣して「見せもの」化し、その問題点が自ずから露呈するように仕向けた演劇的な技法が挙げられる。無謬性の外見をもった報道を脱構築し、それが成立させていたリアリティの演出を失効させるゲームに諷刺性が発揮された。時代の言説を記録する「貝殻」に例えられたそのテキスト系列は、反戦悲劇『人類最期の日々』に結実した。しかし彼の諷刺は事実と虚構が逆転可能な関係にあることをシミュラークル論に先駆けて暴露しただけではなく、社会的生の基盤としての言葉の価値をめぐって、文学的な制度とも対決した。これが第二点であり、そこでは一切の権威が脱神話化され、文学的創造への参加資格が精神病院に入院中の無名の工具にも認められた。ミメーシスが本来的に含意する「作者の死」の露呈である。第三に、歴史的ミメーシスと不可分の関係にある感性的な知覚の復権が、戯曲を朗読する「文芸劇場」で言葉の重点課題となった。オッフエンバック『パリの生活』朗読の録音が暗示するように、クラウドがユダヤ人諷刺家として追求した同化理想は、政治的挫折の前に言葉の次元では実現の瞬間を見たと言える。

4. 『異性装者たち』— 異性模倣による「男／女らしさ」の攪乱 —

嶋田 由紀

20世紀初頭のベルリンで活躍した性科学者マグヌス・ヒルシュフェルトは、内的欲求から男が女の服を纏い、あるいは女が男の服を纏う行為を「異性装」と名付け、それらの10年にわたる調査結果を『異性装者たち』にまとめた。異性装は単に異性の服を纏うだけでなく、容姿、身振り、行動や思考まで異性に同化しようとする点で、異性の模倣だということができる。このような模倣行為について、例えばジュディス・バトラーは、男／女のジェンダーをパロディー化し、その境界を攪乱するものと評価している。本発表では、この観点からヒルシュフェルトの『異性装者たち』を分析し、当時の服装改革運動・女性運動・ナショナリズムに目を配りながら、そこで提示されるジェンダー境界の攪乱の内実を明らかにする。その際、目標とされるのは、先行研究の理論的強化ではなく、ロマン派において自明とされていた「模倣対象（オリジナル）の正統性」に対し再考を迫ることである。この正統性は普遍的真理としてあるのではなく、その時代が要求する文化社会的コードに強く依存している。20世紀初頭において、男装は女の権利回復運動の一環とみなされたのに対し、女装は近

代的主体と等価に結びついた「男らしさ」を放棄し、「男らしさ」の正統性をも揺るがす行為として受け止められたことが、それを逆説的に証明しているだろう。

5. 映像が言葉を模倣する？——〈文学作品の映画化〉論序説

柳橋 大輔

〈文学作品の映画化〉をひとつの〈模倣〉ととらえるとき、その産物である映画作品は、とりわけ文学研究の文脈において、しばしば〈模造品〉として

ノルマティーフ

規範的な批判の対象となってきた。しかし、模倣を〈他者に同一化しようとする行為〉と見做すかぎり、この営為はあらかじめ不可能性を刻印されている。というのも、もし〈オリジナル〉との〈同一化〉が達成されてしまえば、模倣行為はもはやそれとして成立しえないからである。こうした模倣のアポリアは、〈文学作品の映画化〉を副次的な地位から解き放ち、これに独立した価値を認めることによって解消されはするが、その結果、文学作品とその〈映画化〉との関係は周縁的な位置へと追いやられてしまう。こうして、〈文学作品の映画化〉を正当に考察しようとするれば、それを〈模倣〉的営為として認めつつ、その〈成否〉を問題にする規範的な判定ではないかたちでその産物に取り組む間メディア的な方法を探らねばならないことになる。

本発表では、同一の原作をもつ複数の映画からとられたシーケンスを分析し、各々の〈模倣〉の様態を相互に比較するという方法を提案したい。ここで目指されるのは、各〈映画化〉作品の原作への〈忠実さ〉をもってその優劣の判断を行なうことではない。むしろ、言語と映像との間メディアの関係性が示す差異を手がかりに、各〈映画化〉作品が制作された当時の布置状況の変位を測定することである。

シンポジウムⅡ (14:30~17:30) B 会場 (12 号館 4 階 402 教室)

関口文法の射程—主著『冠詞』のダイジェスト版をてがかりにして

Tragweite der Sekiguchi-Grammatik

— Reflexionen zur gekürzten Fassung seines Hauptwerkes „Der Artikel“

司会：山下 仁

近年、日本の内外で関口文法が注目されている。2007年3月22日、23日には浜松医科大学で「関口文法と現代言語学」というシンポジウムが開催され、2009年には Kennosuke Ezawa, Kiyooki Sato, Harald Weydt (Hg.)

Sekiguchi-Grammatik und die Linguistik von heute が刊行された。2010年7月30日から8月2日にかけて、ポーランドのワルシャワで開かれた IVG の第 17 部会でも、江沢建之助、佐藤清昭、Harald Weydt の 3 名が中心となり „Synthetische Grammatik des Deutschen als einzelsprachliche Grammatik auf universeller Basis“ というテーマのもとで議論がなされた。 „Synthetische Grammatik“ というのは G. von der Gabelentz に由来する概念だが、この部会では、本シンポジウムの発表者・コメンテーターでもある佐藤清昭、菅谷泰行、細谷行輝をはじめとする研究者が関口文法に関する発表をおこなっていた。

ドイツ語圏では、『前置詞の研究』 *Deutsche Präpositionen – Studien zu ihrer Bedeutungsform* (Niemeyer) に続き、2008年には『独作文教程』 *Synthetische Grammatik des Deutschen, ausgehend vom Japanischen (iudicium)* が独訳され、さらに『接続法の詳細』の独訳の企画も進められているという。これらから、関口文法はドイツ語圏のドイツ語研究者によって一定の評価を得ていることがうかがえる。また、日本でも 2010年に池内紀が一般読者に向けて『ことばの哲学、関口存男のこと』(青土社)を著した。

他方、冠詞研究会では 20 年近くわたる研究会のレジュメをもとに、関口存男の代表作である『冠詞』全三巻をおよそ 10 分の 1 にしたダイジェスト版を作成しつつある。本シンポジウムでは、そのダイジェスト版の一部を参照しながら、関口文法の現代的意味を考える。その目的は、日本語母語話者にとって最大の難関であるドイツ語の「冠詞」をどのように研究し、どのように教育することが可能であるのかについて、シンポジウムの参加者とともに議論を深めることにある。

これまで、日本独文学会でのシンポジウムで関口が取り扱われる場合、ともすれば関口が神格化され、その「信奉者」によって関口文法のすばらしさがクローズアップされてきた。しかし、今回のシンポジウムでは、できるだけ客観的に、部分的には批判的観点も取り入れながら関口文法の射程について考察する。客観的な議論をおこなうためにも、関口の著書の一部を正確に確認する必要がある。それゆえダイジェスト版のサンプルを用意し、ダイジェスト版の作成に関する冠詞研究会での議論を紹介する（山下）。また、50年以上も前に著された関口の『冠詞』と現代における機能的言語研究の関連性を「アスペクト」の観点から考察し（田中）、関口文法の潜在的価値を明らかにするべく言語産出面での実用可能性について検討を加える（高橋）。さらに、これまであまり取り上げられなかった関口の特異とも言える文体と意味形態論との関係を哲学的観点から解明し（菅谷）、最後に関口文法を「話（わ） Sprechen の文法」としてとらえることの重要性について考察を加える（佐藤）。

実際のドイツ語の授業で関口を取り扱った場合の学生の反応なども紹介しつつ、関口文法が今日のドイツ語教育・研究にどのような役割を果たすか、ざっくばらんに議論してみたい。

1. 「冠詞」再考にむけて：『冠詞』ダイジェスト版について

山下 仁

ダイジェスト版の作成には、冠詞研究会内にも反対の声があった。たとえば有田潤は、オリジナルを10分の1にしても消化不良になる、関口の用語、とくに「意味形態」は複雑でダイジェスト版を作ってもその問題は解決しない、複数の人でまとめる場合まとめ方がまちまちになる、関口の用語法は難解であるばかりでなく多義的であるため、いったんその用語法から離れたほうがよい、すでに冠詞に関しては類書がある、などの根拠を挙げてダイジェスト版の作成は不可能である、という手紙を送ってきた。しかし、他の冠詞研究会の参加者は、有田の意見ももっともだが、『冠詞』全三巻2335頁を一人で読破するのはきわめて困難であり、その困難さのために読まれぬままであれば、せっかくの名著が利用されないままになる。従って、将来的にオリジナルを読んでもらうことを期待しつつ、あるいはこれを手がかりとしてオリジナルを読んでもらうためにも、ダイジェスト版には意味がある。それゆえ、有田の意見も尊重し、

要約する者の意見はできるだけ含めず、『冠詞』の要点を、読みやすい形にしてまとめたものを作ってみよう、という見解に達した。

本発表では、そのサンプルを手がかりに、冠詞を大別する「具体化規定」及び「特殊化規定」、不定冠詞の役割を示す「個別差」、「不定性」、「質」、そして「仮構性」の含みといった具体的な意味形態を示し、関口文法の現代的意味について考えるきっかけとしたい。

2. 『冠詞』とアスペクト：機能的言語記述に見る関口の現代性

田中 慎

関口の『冠詞』の記述の対象は、単に冠詞や名詞句の領域にとどまらず、文やテキストの構成を視野に入れながら、言語全体の体系の一部としての冠詞を扱ったものと捉えることができる。その意味で、関口の冠詞論は、現代における機能的言語研究に重要な知見を提供している。本発表では、このことを「冠詞」と「アスペクト」の関係を中心に論じて行きたい。

関口の『冠詞』第二巻不定冠詞篇第三章では、「単回遂行相動作」という概念を導入し、ドイツ語の動作名詞における不定冠詞の使用を説明している。「本来「コト」を表すとされる文、述語句の内容を、本来「モノ」を表すべき名詞の枠組みにおいてどのように表現するのか」という問題提起をしながらドイツ語の冠詞のしくみを詳述している。ここでは、80頁以上にわたり冠詞とは一見まったく関係のない現象を取り上げ、ギリシア語のアスペクトを記述する文法概念（アオリスト）を駆使しながら説明している。この大いなる寄り道を、関口は章の冒頭で「普通ならば間接にしか関係のない問題が最も直接に関係があるのだ」と述べているが、これは、現代の機能的言語研究になされている多くの「発見」と意を通じているものである。本研究では、とりわけ Leiss の *Artikel und Aspekt* で提示された議論を中心に、関口の『冠詞』記述の現代性を論じて行きたい。

Leiss, Elisabeth (2000): *Artikel und Aspekt, Die grammatische Muster von Definitheit*. Berlin / New York: Walter de Gruyter.

3. 関口文法と語彙意味論的手法との接点：コピュラ文の分析を例に

高橋 亮介

本発表では、様々な概念を用いた関口文法の有用性ならびに問題点を具体的に示すための一例として、コピュラ文という表現形式を取り上げる。

関口は、ドイツ語のコピュラ文 „A ist B“ の A が人間にあたる事例において、B に相当する名詞がいかなる場合に不定冠詞を伴い、また、いかなる場合に無冠詞で用いられるのか、というドイツ語学習者にとって難解な問題を扱っている。その上で関口は、概略、「職業や国籍、信条、党派などを挙げる」場合には無冠詞、「性質を紹介したり評したり形容したりする」場合には不定冠詞付き、という原則があることを指摘している。こうした特徴づけは、学習者が実際に接する用例を解釈吟味する上で重要な目安となり得るものの、そもそも個々の特徴づけが真に成り立つかどうかという点に関しては、独立的な認定基準が提示されていない。そのため、関口による特徴づけは、学習者が自らコピュラ文を用いて何事かを表現しようとする場合にどの用法が適切なかを判断する上での指針としては必ずしも十分ではない。

以上の問題点を踏まえた上で、本発表では語彙意味論的な知見を取り入れ、関口が導入する諸概念の具体的な現れとして理解できるような日本語上の形態統語現象を指摘する。さらには、そうした形態統語現象を活かした診断法を援用することにより、学習者にとってドイツ語コピュラ文における不定冠詞の有無が把握しやすくなることを示す。

4. 関口文法の説明法：意味形態論との関連から

菅谷 泰行

従前の関口文法研究は、1) 関口が説く意味形態の咀嚼や啓蒙、2) 統合文法、3) 認知言語学の3つのアプローチに分かれるように思われる。このうち、第三の方向は関口文法に認知言語学という新たなフィールドを与えるとともに、関口文法の要である「主観性」の問題を「主観的事態把握」の視座から洗い直すことによって、この文法を主観性に長けた日本語の特質を背景とする「日本的言語学」あるいは日本語による「話の言語学」へ育て上げる可能性を示唆している点で、興味深い。たとえば、関口文法研究史では、これまでも国語学に

おける時枝文法との近似性が話題に上ることはあったが、同様の手続きから、主客非分離の「場」を説いた西田哲学への言及の可能性も考えられる。たとえば、「錯構」（『冠詞』第三巻「無冠詞篇」第十一章）は、「もの」と「こと」、「規定」の2点において、関口文法の真骨頂を示す現象であるが、この「錯構」についても主観的事態把握の視点から再検討することが可能となるだろう。

ところで、関口文法におけるこの日本語との関わりは、関口が説く意味形態の内容面だけでなく、表現面（意味形態の説明法）にも深く関与している。過去の関口文法研究では、考察の対象として関口の説明法が取り上げられることはなかったように思われるが、本発表では、上記の内容面に結び付けながら、その説明法が関口の意味形態論の必然的帰結であることを明らかにしたいと思う。

5. 「話（わ） Sprechen の文法」としての関口文法

佐藤 清昭

関口存男の意味形態文法は、人間の自主的、主体的な活動としての「話（わ） Sprechen」を研究対象とする文法である。『冠詞』に代表される関口文法を正しく理解するためには、このことをはっきりと意識する必要がある。

関口文法が「話（わ）」を研究対象とする文法であることは、1）それが「統合文法 *Synthetische Grammatik*」であること、つまり「意味内容から出発して形態にいたる文法」であること、2）関口の研究した対象（「意味形態」）が個別言語の「体系」上の要素ではなく、社会的・伝統的に決められた、「規範」としての「意味の種類」であること、の二点に確認することができる。この「意味の種類」は、人間が話す際、つまり「話（わ）」においてはじめて現れる現象であり、「話」において話者が直接に手がかりとするものなのである。

もちろん、「話（わ）の文法」、あるいは「話（わ）の言語学」は関口だけのものではない。しかし関口文法が際立っているのは、その底辺に常に流れる *synthetisch* な研究のプリンシプルである。

このような関口文法は、世界全体の学問の中でどういう意味を持ちうるか？ 関口は「人間による言語の能動的使用」を前提として自らの言語研究を展開したのであり、関口文法は *synthetisch* な観点に裏打ちされた「話（わ）の文法」として、「人間と言語の関係」の解明に多くの示唆を含むものである。

ドイツ語音声教育の現状と可能性

Phonetik im Deutschunterricht: Status quo und Möglichkeiten

司会：新倉 真矢子

話しことばによる人間同士のコミュニケーションに音声は不可欠である。音声言語には伝達する意味内容が含まれているだけでなく、外国語訛りや社会的な位置付け、心理状態や感情表現などといった言語以外の情報が付随する。音声による情報をことばで表すには、その言語に適した伝達の仕方が必要であり、個々の音の発音の仕方だけでなく、イントネーションやリズムなどプロソディについても目標言語に適した音声使用でなければ正しく伝わりにくく、意図したことは異なる解釈がされることがある。不適切な音声は通常の言語使用とは逸脱した印象を与え、コミュニケーションが阻害されることにもつながりかねない。

コミュニケーションを主体としたドイツ語教育を行う際には、ドイツ語の音声に関する教育にも重点を置く必要がある。しかしながら国内外のドイツ語教育においては、音声教育の占める位置や役割は決して大きいとはいえない。日本におけるドイツ語の音声教育は、日本で出版されている初級用教科書を見る限り文字と読み方の関係に限定されているものがほとんどである。授業時間数が限られる中、音声教育に配分される時間はごくわずかに過ぎない。そのような現状に鑑み、本シンポジウムでは音声教育の重要性を再認識し、問題点を多角的に取り上げ、その課題や解決策を探す。発表には音声言語の持つ重要性をもとに、現在の日本におけるドイツ語音声教育のあり方をめぐる問題や学習者に効果的に音声を習得させるための提案が含まれる。

音声教育の問題には、主に音声的・音韻的要因、教育的要因、学習者要因が関係する。本シンポジウムでは各要因もしくは複数の要因に係る分野に言及する。音声的・音韻的要因には、母語である日本語と目標言語であるドイツ語のみならず日本語母語話者にとって第二言語となる英語についても、分節素・超分節素の体系的な比較や言語間にみられる相互の影響などが含まれる。音声は母語の音韻体系の影響が最も顕著に表れる分野であるため、各言語の対照研究を行い、あらかじめ構造的な相違点を明らかにしておく必要がある。さらにド

イツ語音声に特有の「音変化」の現象や、日本語とは異なるドイツ語の韻律が意味・機能と関係して表される「心態詞」も含まれる。また、生成や知覚に関する母語の影響の問題も取り上げる。教育的要因には音声教育、教授法などが挙げられるが、本発表では教科書の発音項目についての質的・量的な分析や、ドイツ語学習者の音声教育に対する意識調査の結果を報告する。学習者要因としては、学習経験、学習目的、学習スタイル、音声学習ストラテジー使用による自律学習を促す学習法の重要性が指摘できよう。

このような様々なドイツ語音声教育をめぐる問題を整理するとともに、ドイツ語学習者にいかに効果的に音声を習得させるか、そして音声教育の在り方について現状を報告し、可能性を提案する。

1. ドイツ語音声教育の実態調査の結果

正木 晶子

大学におけるドイツ語教育の中で、発音やイントネーションといった音声教育の占める割合は決して大きいとはいえない。それは授業で使用される教科書全体に占める音声項目の割合を、量的に分析しても明らかである。

本発表では、日本の大学におけるドイツ語の音声教育の現状を、①全国の主に大学でドイツ語を学ぶ1172名を対象に行った音声教育に関する意識調査の結果と、②日本及びドイツで出版された複数の教科書の分析の両面から、明らかにしようとするものである。

意識調査では、学習者がこれまで受けてきた音声教育と、音声教育への要望についてアンケート調査を行い、結果を分析した。一方教科書分析では、2009年～2010年の2年間に国内の各出版社で新刊・改訂版として出版された教科書22冊と、ドイツで出版され、日本でも使用される頻度が高いと考えられる教科書9冊を選び、どのような音声項目が、どの程度の割合で取り上げられているのかについて、質的・量的に分析した。

その結果、「発音をもっと教えてもらいたい」とする学生は約半数を占め、「発音の上達」に関心のある学生は9割以上である一方、教材分析では、教科書の総頁に占める音声項目の割合は平均で2%に過ぎず、量的に判断する限り、学習者の要望から乖離している実態が浮き彫りになった。また国内外の教科書間で、扱われる音声項目の割合に違いが観察された。

この結果から今後の音声教育のあり方について、課題を提起したい。

2. 音変化が生成に与える影響と音声教育

粕谷 麻里乃

ドイツ語のはなし言葉には、母音弱化や語尾縮約、子音同化などの音変化が頻出するが、これまで音声教育ではあまり取り上げられてこなかった。母語話者は、意味伝達上重要度の高い音節の発音は明確にする一方、重要度の低い音節の発音は簡略化し（Lindlom 1990: H&H 理論）、社会的状況を考慮して音変化の度合を調整している（Lindblom 1963: Target undershoot）。音変化には、「強勢」「子音環境」「話速」が影響し、これは強勢拍リズム言語にみられる現象として知られる。母音の音変化は、発話中に同時調音や母音弱化を頻繁にもたらすことで子音連続が頻出し、学習者の知覚・生成上の問題を起しやすくすると考えられる（Ramus et al. 1999）。中でも、母音弱化は無強勢母音のみに起こるとされてきたが、話速によって有強勢母音にも確認され、ドイツ語音声習得上重要な役割を担うと考える。日本語を母語とするドイツ語学習者の習熟度別調査でも、上級者ほど母語話者のように音変化に敏感であり、学習効果への可能性を示唆する結果も得られた。しかし、実際の音声教育現場では、弱化への教育的示唆もほぼ皆無に等しい。音変化は、自然な発音や聞き取りに重要な役割を果たしており、学習者が習得しなければコミュニケーション上の弊害となる可能性も否めない。本発表では、ドイツ語の音変化における現象を紹介し、母音弱化現象について日本人学習者に発話実験を行った結果を踏まえ、ドイツ語の音変化が生成に与える影響について考察する。

3. 話しことばの意味・機能と音声

— ドイツ語心態詞の韻律的特徴およびその習得 —

生駒 美喜

ドイツ語の話しことばにおいては、ja, doch, denn, schon などの心態詞が頻繁に用いられる。心態詞の意味・機能は韻律的特徴とも深くかかわっており、音声コミュニケーションにおいて非常に重要な役割を果たしている。非母語話者であるドイツ語学習者にとってはその意味・機能を正しく知覚し発話することは

非常に難しい。心態詞はドイツ語の初級教材においても頻繁に用いられているが、その意味・機能およびその発話・知覚はドイツ語授業ではほとんど扱われていないのが現状であろう。ドイツ語学習者にとって、心態詞を含む発話の音声習得はより円滑なコミュニケーションを行うために必要不可欠である。

発表者はこれまで心態詞 *ja, doch, denn, schon* を対象に、発話・知覚の両面から音声分析を行い、それぞれの意味・機能と韻律的特徴との関わりを研究してきた。その結果、心態詞はそれぞれの意味・機能に特有の韻律的特徴を持ち、アクセントの有無のみにかかわらず意味・機能によって様々な異なる韻律的特徴が見られた。また心態詞の発話を用いた知覚実験の結果、母語話者は多くの場合音声のみで正しい意図を知覚できることが分かった。さらには、「反論」という類似する意図を持つ異なる心態詞(*doch, schon*)において、類似する韻律的特徴が見られた。本発表では、特に学習者にとって重要と思われる韻律的特徴と意味・機能との関係を取り上げ、ドイツ語学習者にとってより効果的と思われる心態詞の発話の習得について考察を試みる。

4. 日本人ドイツ語学習者を対象にした発音訓練システムの開発背景とその問題点

林 良子

日本語を母語とするドイツ語学習者には、発音習得の際に、英語の発音を習得するときと同様の問題点が多く見られる。本発表では、日本語母語話者の英語発音とドイツ語発音に共通に見られる問題点およびドイツ語特有の問題点を、分節レベル、超分節レベル、その他に分けて整理し、それぞれの点に関する英語教育における先行研究等を挙げ、ドイツ語における特有の問題点を明らかにする。

またこれらの音声学的背景をもとに、発表者が作成してきた音声教育の基礎資料(声帯振動、MRI 動画)、発音訓練システム(ATR CALL Deutsch、シャドーイング訓練装置)の概要を述べ、音声教育の基礎と応用どちらにも動画資料や自律学習を促進させる CALL 教材が必要であること、またその効果についての研究成果の一部を述べる。

最後に、PC を用いたこれらの訓練においては、個別、個々の練習に陥る危険があり、発声の方法、表現力の豊かさ、対人コミュニケーションの円滑化とい

った面においては、直接の効果が現れにくいという問題点を指摘する。今後、ドイツ語音声教育において、教育面では、身体の動きを意識した発音学習方法や、タンデム学習など対話状況における発音訓練などの実施が、研究面では、これらの学習方法の効果の検証や外国語音声の印象評定など、対人コミュニケーションにおける音声研究が重要となってくるであろう。

5. Ein Vorlese-Diktat-Test: betonte und notierte Schlüsselwörter weisen auf Ausspracheprobleme und Probleme von Textbuch-CDs hin

Markus RUDE

In diesem Vortrag geht es um lautsprachliche Produktion und Perception in der Fremdsprache Deutsch, und zwar durch japanische Lernende im 1. Jahr Deutsch als Fremdsprache. Speziell geht es einerseits um die Aussprache von Lernenden beim lauten Vorlesen, sowie andererseits um die Wahrnehmung des Vorgelesenen durch zuhörende Lernende; dabei wurde die Aussprache durch eine Tonaufnahme der Vorlesenden, die Wahrnehmung durch stichwortartiges Notieren von Schlüsselwörtern seitens der Perzipienten dokumentiert. Eine Fehleranalyse der notierten Schlüsselwörter macht deutlich, dass es Defizite auf mindestens drei verschiedenen Ebenen gibt: auf der Wahrnehmungsebene, auf der Produktionsebene und auf der Ebene der Lehrmaterialien, und zwar sowohl für suprasegmentale Phänomene (falsche Schlüsselwörter wegen Akzentuierungsproblemen) als auch für segmentale Phänomene (richtige Schlüsselwörter, jedoch fehlerbehaftet). Ursachen können unter anderem phonetische Interferenzen sein (Dieling, H. & Hirschfeld, U., „Phonetik lehren und lernen“, S. 26). Drei Folgerungen können gezogen werden: erstens sollte auch suprasegmentale Aussprache, insbesondere die Rolle und die Realisierung des Satzakkzents, schon bei Anfängern vermittelt werden. Zweitens sollten bei der Auswahl von Lehrbüchern die begleitenden Audiomaterialien ebenfalls gründlich geprüft werden und drittens sollten unter Ausspracheübungen solche bevorzugt werden, die – wie bei dem geschilderten Vorlese-Diktat-Test – den engen Verbund von Phonetik mit anderen linguistischen Bereichen vertiefen.

6. 「音声学習ストラテジー」を用いた音声習得の可能性

新倉 真矢子

外国語の音声習得するには、母語と目標言語の音韻構造・音声特徴の相違や言語の有標性の問題などを考慮する必要がある一方、学習スタイルや学習方法など学習者の学習特性も大きく関与することが挙げられる。音声の習得は特に個性が高いため、習得の速さや到達度に違いがみられる学習者が教室に混在するのが現状である。

本発表では、学習目的や適性など様々な内的要因を持つ学習者側に焦点を当て、個別に対応する音声教育として、学習ストラテジーを使用した、自律的な学習プログラムの実例を紹介する。CALL教材を用いて初級後半レベルの学生が自ら学習計画を立て、自分の目的に合った学習ストラテジーとタスクを選択し、自律的に発音のトレーニングを行う。

また、自律学習の中で音声の習熟度が高かった学習者が使用したストラテジーを分析し、特にメタ認知ストラテジーの使用が高いこと、ビリーフ調査から将来への展望の高い学生は音声の習熟度も高いという結果をもとに、メタ認知ストラテジーを用いて教室活動にグループ練習を取り入れ、それを応用した例を紹介する。

これまでは学習ストラテジーを四技能や単語の習得などに適応させた研究は行われていたが、発音に関する学習ストラテジーを研究した例やそれに特化したプログラムはわずかしかなく (Mehlhorn 2006, Peterson 2000, Berkil 2009)、特に日本人ドイツ語学習者に対してのものはないことから、これからの音声教育の可能性の一つとして本プログラムを提示する。

1. 話法の助動詞としてのドイツ語 *dürfen* とチェコ語 *smět* の類似性: 現代語と古期聖書訳からの考察

油尾 昌輝

チェコ語は、スラヴ語派のなかでも歴史的にドイツ語の影響を受けてきた言語の一つとされており、話法の助動詞においてもその影響がみられる。ドイツ語 *dürfen* とチェコ語 *smět* は共に現代では許可と（否定を伴い）禁止を表す話法の助動詞であるという類似性を見せている。他のスラヴ諸語においてチェコ語 *smět* と同根語にあたる動詞は、歴史的にドイツ語圏と接触があった地域の言語では話法の助動詞である一方、ドイツ語との関連性が薄い言語では内容語として意味を持った動詞である。このことから、チェコ語 *smět* が話法の助動詞であることには、ドイツ語が影響していると考えられる。

ここで、古期文献を分析するなかでも両動詞の類似性を見出した（なお、文例については両言語で書かれた古期の聖書訳を参照している）。16世紀半ばのルター訳聖書ではドイツ語 *dürfen* の意味に文例数順で 1. 必要性、2. 「敢えてする」（英語 *dare* に相当）、3. 可能性が見られる。また、否定と結びつきやすい傾向も見受けられる。一方チェコ語 *smět* では、17世紀初頭のクラリツェ聖書のなかで「敢えてする」の意味のみが現れており、同じく否定を伴いやすい点が挙げられる。現代の意味への変遷を考えると、両動詞ともに否定と結びついた特定の表現から意味が変化し、話法の助動詞へ文法化をしたという類似性が挙げられる。この点からもチェコ語 *smět* にはドイツ語の影響があると考えられる。今回の発表では上記のように、共時的対照に加えて通時的対照からも両言語の類似性を検証し、更に言語接触の可能性を探ることを目指している。

2. 現代ドイツ語の程度副詞を対象としたテキストマイニングの試み： 20世紀における時系列変化と口語／文語の差異について

今道 晴彦

いわゆる程度副詞と呼ばれる語句を収集し始めると、その数の多さに気づかされる。その多くは口語に特徴的で、俗語や方言、古語も見られ、現代語にも消長があるものと推察されるが、その実態はよくわかっていない。他方で、程度副詞は雅語としても使用される。しかし、口語と文語において、使用語彙や使われ方にどのような違いや共通点があるのかは不明である。本発表では、テキストマイニングの手法を援用して、これらの問題にアプローチする。

程度副詞に関しては、これまでいくつかの分析がなされてきており、理論言語学的観点からは、形態・統語・意味・機能レベルの特徴づけが試みられている (Biedermann, 1969; van Os, 1989; Engelen, 1990; Kirschbaum, 2002; Breindl, 2009)。また、計量的観点からは、コーパスに基づく分析を通して、程度副詞には一定の使用傾向が見られることが指摘されている (Granger, 1998; 井口, 2011)。これまで上述の問題は議論されていないが、計量的手法は、時系列変化やモード差を探る上でも、有用な手立てのひとつになると考えられる。しかし、一定の時間幅のある過去の口語資料の収集は困難である。

そこで、本発表では、1) 口語的要素を含意するフィクションと、学術書に関する過去100年間の資料を元に、語彙・コロケーション・共起構造に焦点をあてて、程度副詞の時系列変化とジャンル差を探る。2) また、1)を通して、口語と文語の間にあると想定される使用上の差異について推察を試みたい。

3. ドイツ語形容詞における経験主のコード化 — 構文文法的アプローチ

宮下 博幸

本発表では主に感覚や感情に関わる形容詞を扱う。このような形容詞は経験主が *Mir ist (es) kalt.* のように与格で現れたり、*Ich bin traurig.* のように主格で現れたりする。本発表ではこのように一見不規則のように見えるドイツ語形容詞の経験主のコード化が、与格経験主構文と主格経験主構文の2つを仮定することで、ある程度予測可能となると主張する。感覚や感情に関わる形容詞には *kalt* や *traurig* のように与格もしくは主格どちらか一つをとるものと、形容詞の解釈

は変わるものの、どちらも可能なものがある。例えば *traurig* は **Mir ist (es) traurig* のように与格経験主は許さないが、*kalt* は *Ich bin kalt* のように主格が立つこともありうる。しかしこの場合は「私は寒い」という意味にはならず、性格的に「私は冷たい」もしくは「私の体が冷たい」のような解釈となる。また「悪い」を表す形容詞 *schlecht* は、*Ich bin schlecht in Mathematik* のように主格が現れると「私は数学が苦手だ」、*Mir ist (es) schlecht* のように与格経験主が現れると「私は気分が悪い」という解釈がなされる。本発表では主格+コブラ+形容詞構文、与格+コブラ+(es)+形容詞構文の2構文を仮定し、データに基づきつつ、それぞれの構文の意味を探る。そして *traurig* のように主格経験主しかとらない形容詞、ならびに *kalt* や *schlecht* のような形容詞の振る舞いは、構文の意味と形容詞の意味とのマッチングの観点から説明できることを示したい。また同時にそのような説明が当てはまらない場合についても考察を加えたい。

4. 属格・対格を支配するドイツ語形容詞の統語的振る舞いについて — 相関詞との関係を中心に —

信國 萌

ドイツ語形容詞には、かつて属格を支配していたが、現在では対格を支配するとされていたり、属格と対格のどちらと結びつくかの選択に揺れがあるとされていたりするものがある (Zifonun/Hoffmann/Strecker 1997, Helbig/Buscha 2001 など)。本発表では、このような形容詞 8 語 (*gewahr, gewärtig, gewohnt, leid, los, müde, satt, überdrüssig*) を取り上げ、コーパスの事例を基に、その統語的な振る舞いを分析した結果を示す。調査内容は、①当該の形容詞が述語的に用いられる際の補足成分となる名詞句の格の選択、②補足成分が *zu* 不定詞句や副文である際の相関詞の出現の有無である。分析の結果、属格・対格のどちらとも結びつくとされていたこれらの形容詞に、実際にはそれぞれどちらか一方の格を優先的にとる傾向があることが確認された。さらに、このような格支配の相違と相関詞の義務性との間には一定の関連性があり、属格と結びつく傾向にある形容詞はたいてい相関詞を必要とせず、対格と結びつく傾向にある形容詞は相関詞を必要とすることが多いことも認められた。この関係性の契機として、*zu* 不定詞句や副文で表される事象と形容詞述語との意味関係がそれぞれの形容詞で異なることが一つの要因と考えられることを、三瓶(1985)や Leiss (1991)、梶田

(1994)などと関連づけて説明することを試みる。また、格の選択と相関詞の有無の相関関係が、当該の形容詞が述語を形成する際のコプラの選択とも関連している可能性があることを指摘する。

5. „Wir waren wandern.“ – Der Absentiv im Deutschunterricht für AnfängerInnen.

Berlinde Vögel

Der Absentiv, eine grammatische Form bestehend aus „Subjekt + Verb *sein* [finit] + Handlungsverb [Infinitiv]“ wird im Deutschen oft verwendet, hat bisher jedoch keinen Eingang in Grammatiken für den DaF-Unterricht gefunden.

Nach einer kurzen Zusammenfassung des Forschungsstandes wird insbesondere auf die Bewegungsverben eingegangen.

Der Absentiv wird vor allem mit Tätigkeitsverben verwendet. Um den Absentiv im DaF-Unterricht einführen zu können, sind genaue Kenntnisse der Verwendung des Absentivs bei Bewegungsverben notwendig. Zur Untersuchung des mündlichen Sprachgebrauchs gibt es nur wenige Korpora, deshalb sollen MuttersprachlerInnen befragt werden, ob die Verwendung des Absentivs mit Bewegungsverben akzeptabel ist. Das Ergebnis dieser Umfrage wird im Vortrag referiert.

Der Vortrag schließt mit Überlegungen, inwieweit es sinnvoll sein könnte, den Absentiv im AnfängerInnenunterricht einzuführen.

口頭発表：文学1（14:30～17:05） E会場（12号館2階201教室）

司会：高橋 明彦, 徳永 恭子

1. 『散文ランスロット』における英雄像 — 聖杯騎士ガラートは「救世主」なのか? —

浜野 明大

『散文ランスロット』はハンス＝ヒューゴ・シュタインホフの翻訳した五巻本が2004年に完成したことによって、近年再び注目されている中世文学作品で

ある。この作品が多くの中世研究者たちの興味を惹起しているのは、中世ドイツ圏では最初の本格的な散文形式の作品であったゆえだけではなく、古フランス語、中世オランダ語原典などが存在するなど、広くヨーロッパの枠組みにおける中世文学作品としての高い評価にもあろう。本発表では、『散文ランスロット』研究史における、主人公ランスロットの息子で、完璧な英雄として描かれている聖杯騎士ガラートをめぐる議論に焦点を当てていく。クルト・ルー（1970）、クリストフ・フーバー（1991）、クラウス・リダー（2009）たちは聖杯騎士ガラートを Erlöser「救世主」と位置付けている。これに対し、ヴァルター・ハウグ（2007）は異論を唱え、ガラートは救済史的な意味における「救世主」ではないとし、世界を救済するのではなく、結局は自分自身を救済しているだけである、と主張する。これにフーバー（2008）は、ここでの「救済」とは系譜上資格を付与された一部のエリート階級にのみ与えられ、ガラートにおける「救世主」とは、その者によって人類の歴史経過が一新されるであろうという、皆のための「救世主」とは逆の性質のものであり、あくまで自己救済的なものである、と再び反論する。この議論に対して一考を加えることを本発表の目的とする。

2. 『陽気なヴッツ先生』における語り手ジャン・パウルの誕生

嶋崎 順子

ジャン・パウルの小説は、ほぼ全作品を通じて作者と同名の架空の語り手が当該の物語を語るという体裁を取る。この形式が初めて用いられたのは、最初の長編小説『見えないロジ』(1793年出版)に付録として収められた短編『アウエンタールの陽気なマリア・ヴッツ先生の生涯』においてである。短編の後半、語り手は登場人物の一人として物語の現在に参入し、主人公の臨終に立ち会い、彼が生涯をかけて書き残した文書を託される。物語では教師という職がヴッツ家の世襲職であることが強調される一方で、語り手はヴッツの不在中の息子に代わって、彼の精神的な所産であり、一個人の記録である文書を受け継ぐ。この死者からの精神的な生命の引き渡しと、これによって物語の語り手が生まれることこそ、この短編の核心にほかならない。主人公に与えられた「マリア」という名は、この作品がキリストに擬せられた語り手の誕生を主題としていることを示唆している。

ジャン・パウルの小説を特徴づける自己言及的な語り手の存在は、従来、主に近代的自我の問題と関係づけられてきた。しかし、その小説家としての出発点に位置する『ヴッツ先生』において告知された、「死者を記憶する者」としての語り手の使命および、これと結びついた「現世的なものの肯定」への意志については、これまで多く取り上げられることはなかった。本発表では、語り手のこの側面に注目して、ジャン・パウル小説における語り手の役割をとらえなおし、ジャン・パウルが諷刺から長編小説へ向かう道筋において、牧歌（『ヴッツ先生』は「一種の牧歌」という副題を持つ）というジャンルを経由した理由を明らかにしたい。

3. ホフマンスタール『アンドレーアス』における手紙の位相

加藤 由美子

18世紀をひとつの頂点として、ヨーロッパにおける書簡文化は、20世紀への転換期にもうひとつの盛期を迎えることになる。J・シュトローベルによれば、手紙というディスクールは、18・19世紀の作品を中心に研究がなされてはいるものの、モデルネにおける書簡文化についての研究はまだ途上にある。

フーゴ・フォン・ホフマンスタール(Hugo von Hofmannsthal, 1874-1929)は、電話や電報などの新しい伝達メディアが登場した時代に、好んで手紙を書いた作家の一人である。また、創作においても彼が手紙という媒体を重視したことは、『チャンドス卿の手紙(Ein Brief, 1902)』に代表される「架空の対話と手紙」という独自のジャンルを構想したことに示されよう。未完の作品『アンドレーアス(Andreas)』も、1907年の着想時には、「架空の対話と手紙」の一部として考えられた。その後、この着想が変化し、小説『アンドレーアス』として、1912年から13年にかけて執筆予定の四分の一ほどが書かれた。ただし、作品の形式を変えた後にも手紙はある役割を担っていると考えられる。作品内における手紙は、思い描かれるのみで実際には書かれない、あるいは届かないという否定的相貌を呈しており、コミュニケーションに内包される不完全性を表象しているのではないだろうか。本発表では、20世紀初頭のモデルネにおける書簡文化の一側面を鑑みつつ、小説内の手紙の位相に注目し、『アンドレーアス』解釈に新たな視座を提示したい。

4. 『メルヒェン』としての『はてしない物語』

川村 和宏

ミヒャエル・エンデはゲーテの『メルヒェン』を「人生のどこかある時点で転機をもたらした作品」のひとつに挙げている。実際エンデがメルヒェンに関して述べた内容は、ゲーテが「メルヒェン」というジャンルに関して示した見解と似ている。

本発表では、ドイツ語圏におけるファンタジー文学の旗手と目されたエンデの代表作『はてしない物語』と、ゲーテがジャンルの典型を意識して描いたとされる『メルヒェン』との間に、モチーフや物語展会上の類似性が認められると主張したい。

その際、『ファウスト』と『メルヒェン』の照応関係を手掛かりに考察する。エンデが『メルヒェン』に着目していた事実を指摘した研究者はこれまでもいたが、両作品の内容的な類似にまで踏み込んだ研究は少ない。本発表では、そもそも『メルヒェン』という作品が『ファウスト』に描かれた錬金術の実験の場면을敷衍した物語として構成されている、という解釈を前提とする。その上で、『はてしない物語』に象徴的に描き込まれた錬金術モチーフが、『メルヒェン』、ひいては『ファウスト』と同様の文脈で登場しており、結果としてこの類似が『はてしない物語』全体の結末にも影響を与えていると指摘する。

現代のファンタジーブームの契機となったエンデの代表作が、グリムによるメルヒェン収集と同時期に発表されながらもこれまであまり注目されてこなかったゲーテによる創作メルヒェンを踏襲している事実は、ファンタジーとメルヒェンというジャンルの関係を再考するきっかけともなるはずである。

ポスター発表1 (13:00~14:30) F会場 (12号館2階小スペース)

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

**Einsatzmöglichkeiten von Deutsch und Japanisch als Unterrichtssprachen im
Deutschunterricht in Japan: Ergebnisse einer Fallstudie**

Axel Harting

Die im Rahmen eines Aktionsforschungsprojektes erhobenen Daten zur Wahl der Lehrsprache im Deutschunterricht an japanischen Hochschulen verfolgen das Ziel zu ermitteln, für welche Funktionen die Zielsprache (Deutsch) und die Muttersprache der Lernenden (Japanisch) als Instruktionsmedium zum Einsatz kommen können. Dazu habe ich meinen eigenen Unterricht in einer Anfängerklasse über ein Semester mit einem Tonbandgerät aufgezeichnet und die von mir verwendete Lehrsprache transkribiert und verschiedenen Funktionen des Unterrichts, wie zum Beispiel *Informationen geben, Grammatik erklären, Übungen anleiten* etc., zugeordnet.

In der Präsentation wird zunächst auf das methodische Vorgehen und den Lehrkontext des Aktionsforschungsprojektes eingegangen. Der Hauptteil widmet sich der Darstellung der teils in quantitativer, teils in qualitativer Form vorliegenden Untersuchungsergebnisse. Dabei wird jeweils für einzelne Zeitabschnitte des Kurses dokumentiert, für welchen didaktischen Zweck welche Sprache schwerpunktmäßig verwendet wurde. Mein konkreter Sprachgebrauch wird anhand von Zitaten aus den Transkriptionsdaten exemplarisch dargestellt und systematisch beschrieben. Die im Rahmen dieser Fallstudie erhobenen Untersuchungsergebnisse sollen zu einem Gedanken- und Erfahrungsaustausch mit anderen Deutschlehrenden in Japan bezüglich der Verwendung ihrer Lehrsprache anregen und Impulse für den weiteren Verlauf meines Aktionsforschungsprojektes geben.

ポスター発表2 (13:00~14:30) F会場 (12号館3階小スペース)

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

クルト・ヨースが果たしたバレエと表現舞踊の融合

照井 夕可里

20世紀初頭に誕生した表現舞踊は、舞踊による身体の解放を行い、そこでクラシックバレエのアンチテーゼとして捉えられている。表現舞踊の第二世代になるクルト・ヨース (Kurt Jooss, 1901 - 1979) は、第一世代であるラーバン、ウィグマンに続いて、表現舞踊の社会的地位を変えた舞踊家である。バレエは様式化された技法が存在するのに対して、表現舞踊は即興性と時事性を主とした舞踊であると考えられる。表現舞踊の作品のテーマは、形骸化された様式美に焦点を当てるのではなく、その瞬間、その場の生命に立ち返るようなものを扱うことが多い。

しかしながら、1932年に創作されたクルト・ヨースの『緑のテーブル』には、クラシックバレエの要素と表現舞踊の要素が随所に見受けられる。マイムが多用され、「踊られる演劇」とする向きもある。実際この作品をヨースは、ラーバンの理論を取り入れながらクラシックバレエの技法を織り交ぜ、登場人物が日常の服装で踊る演劇性の強いバレエに仕立てている。彼は、ラーバンによって考案されたシステムを応用し、論理的な動作を用いて舞踊で感情を伝達する方法を生み出した。それはよりよい身体運動を示唆しながらも、均整を重んじるバレエと通じる。

表現舞踊において、過去の意味の堆積を拭き落とした身体、新しい動きを生成する未来の身体が、舞踊の身体として求められた。とりわけ、ヨースの作品における身体は、舞踊的慣習を体現する媒体であることから、創作のための純粋な素材として扱われるようになった。

本発表では、クルト・ヨースの『緑のテーブル』における表現舞踊とバレエの要素に着目し、そこに見られる、独立した芸術である表現舞踊と、バレエとの融合を論証したい。また、併せて、当時の舞踊記録や舞踊家自身の著書から、表現舞踊とバレエの定義づけについても検討を試みたい。

ブース発表1 (14:00～15:30) H会場 (7号館4階0413教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です。)

「学びを学ぶ」ドイツ語授業を目指して —自律学習を促す3つの授業案

池谷 尚美/齊藤 公輔
西出佳詩子/村田 奈保
田原 憲和/中丸 禎子

本発表では、2009-11年「ドイツ語教員養成・研修講座」受講者の有志が、講座で学んだことに基づいた各自の授業実践を踏まえつつ、「自律学習」をテーマとするドイツ語授業案と、その授業の実態に即したポートフォリオを提示する。今後の外国語教育においては、知識や技能を上から教え込むのではなく、学習者自身による主体的な学びを支援する方法を考え、実践する必要がある。発表では、以下の3つの授業案をもとに、学習者の自律性を高めるためにできること、その可能性と限界を、ギャラリーと共に議論したい。

授業案1

特別な教材等を用いない講義型の授業でも、学習者の自律性を喚起することができる。聞き取りの授業での、学習者への働きかけや小テストを例に挙げ、「不完全だからダメ」から「ここまではできる」へと意識の転換を図る。

授業案2

招待状を読んで書くという課題に、学習者がグループで取り組む。教員は、過度な説明を避け、学生の既習知識を活かし、学生同士のインターアクションを促す役目に徹する。

授業案3

模擬授業と映像を作るプロジェクト授業で、教案や実例映像を示しながら長所を解説するとともに、自律学習を導入する際の問題点、工夫点や注意点などにも言及する。

本発表の特色は、発表者全員が、DaFの非専門家だという点である。多くのドイツ語教員は、文学や言語学を専門としながらドイツ語教育に携わっている。

本発表では、DaF と一定の距離を保った立場から、その有効活用の方法を提案したい。

ブース発表2 (14:00～15:30) **I会場 (7号館4階0415教室)**

(ブース発表は途中での出入り自由です。)

ドイツ語方言からの拡充言語ルクセンブルク語と、多言語社会ルクセンブルクの現在

小川 敦
西出 佳代
木戸 紗織

独仏語とルクセンブルク語の3言語が併用されるルクセンブルクは、多言語性を前面に出す一方で、ルクセンブルク語が個別言語としての地位を確立し、使用領域を拡大している。一方、ドイツ語は公教育における識字言語であり、公用語の1つであるにもかかわらず使用領域を徐々に減らしつつある。フランス語は、ロマンス語系移民を中心とする人口の約4割を占める居住外国人や、越境通勤者とのコミュニケーション手段として日常生活に欠かせない言語である。本発表では、3人の発表者がそれぞれの視点から3言語のせめぎ合いの現状を考える。

小川は、現代ルクセンブルクにおけるドイツ語の意義を扱う。ドイツ語は必要性が減りつつあるが、一方でフランス語を不得手とする人にとっては今日でも重要な書き言葉であり、新聞や役所で用いる言語である。社会におけるドイツ語の役割について考察する。

西出は、「外国語としてのルクセンブルク語」を扱う。今日、ルクセンブルク語の口頭運用能力が国籍取得や雇用の条件とされるケースが増えるなど、様々な要因から外国人のルクセンブルク語学習の機会が増えている。ルクセンブルク語教育の現状と、それが言語としての拡充において果たす役割について考察する。

木戸は、ルクセンブルク語訳聖書の社会言語学的な位置付けを扱う。ルクセンブルク語訳聖書は母語の地位向上の証として歓迎する意見がある一方で、権威性に対して疑問視する声がある。発表者が行った聖職者に対するアンケート結果を提示し、カトリック教会においてルクセンブルク語訳聖書がどのように受容されているのかを分析する。

ブース発表3 (16:00~17:30) H会場 (7号館4階0413教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です。)

**《ナクソス島のアリアドネ》におけるツェルビネッタのマリオネット性
—— クライスト《マリオネット劇場について》を手掛かりとした文学的
アプローチと解剖学のアプローチ ——**

野口 方子

山口 康昭 (新潟医療福祉大学)

フーゴー・フォン・ホフマンスタールの作品《ナクソス島のアリアドネ(1912、1916改訂)》における登場人物、ツェルビネッタの持つマリオネット性を、ドラマトゥルギーの観点から肯定的なものとして捉え、その手掛かりをハインリヒ・フォン・クライストの《マリオネット劇場について(1810)》に探る。また、これを観念的な文学論としてだけではなく、解剖学的な視点からの考察も加えることにより、多角的に「人間とは何か」という根源的なテーゼへのアプローチを試みる。

クライストのマリオネット論は19-20世紀転換期に本格的に受容され始め、モデルネにおいて舞踏の身体と人形の身体がクローズアップされる。ホフマンスタールはこのマリオネット論を踏まえて《比類なき踊り子(1906)》を著しており、さらに《アリアドネ》ではツェルビネッタのことを「比類なきツェルビネッタ」と表現している(山口庸子2006)。つまり、ツェルビネッタの人物造形には、明らかにクライストのマリオネット論との関係性が認められるのである。

このクライストのマリオネット論は、従前、「舞踏を文学的に読み解く」ために用いられてはいるが、自然科学の視点からの考察は少ない。重心 **Schwerpunkt**、重力 **Schwere**、関節 **Gelenke**、という単語が意味するものとはなにか。自然科学も、啓蒙主義的な人間理解の構成要素と捉えていたクライストの作品であるが故に、文学と科学との対話こそが、今あらためて必要なのではないだろうか。

第2日 5月20日(日)

シンポジウムIV (10:00~13:00) A会場(12号館5階502教室)

ポストドラマ演劇における現代戯曲の可能性

Moderne Dramen im Zeitalter des postdramatischen Theaters

司会：高橋 慎也

本シンポジウムは現代ドイツのポストドラマ演劇と戯曲との相互関係を踏まえながら、新作戯曲のテーマと形式を分析することを目的とする。具体的な考察対象とするのは、1960年代に生まれ、現在では戯曲作家としての地位を既に固めている四人の劇作家、ローラント・シンメルプフェニヒ、ルネ・ポレシユ、ファルク・リヒター、デア・ローアーの戯曲である。

ドイツの演劇界では1990年代のポストドラマ演劇主流の時期を経て、2000年代になると戯曲の再評価の傾向が強まってきている。これには1990年代以降に発生した世界規模の政治的事件、経済システムの急速なグローバル化、メディア環境の急激な変化などが強く影響している。9.11テロ以降に強まった宗教対立、イラク戦争やアフガニスタン紛争などの地域紛争、移民の急増、世界的な金融危機、またインターネットとマルチメディアの発展などがその例である。それを受けて1990年代以降のドイツ戯曲のテーマとしては異文化衝突、日常世界への戦争暴力の侵入、伝統的家族や社会システムの崩壊、若者の孤立、労働環境の劣悪化など社会的性格の強いものが目立っている。しかし近年の戯曲への再評価を、心理主義的リアリズム演劇や叙事的演劇への戯曲の回帰と単純に捉えることはできない。この間に注目を浴びた戯曲作品は、パフォーマンス性を重視したポストドラマ演劇タイプの上演を前提としながら創作されたものが多いからである。現代戯曲は、状況設定、登場人物の設定と人間関係、ストーリー展開の面でも、ポストドラマ演劇の定着に伴って多様化が進行し、ストーリーとセリフの断片性、各場面のつながりの錯綜性、登場人物のアイデンティティの不透明性と人間関係の複層性などの特徴を示している。こうした状況を受け、現代のドイツ演劇研究にとっても、「ポストドラマ演劇における戯曲の可能性」を再検討する必要性が生じてきている。本シンポジウムはこうした要請に応えようとする試みである。

本シンポジウムで最初に取り上げられる劇作家ファルク・リヒターの戯曲は、「ポストドラマ演劇」の特徴として挙げられるメディア性との関連で分析される。次に取り上げられるデア・ローアーの戯曲は、「ポストドラマ演劇」の問い直しを迫る「ドラマ演劇」の進化形として提示される。三番目に取り上げられるローラント・シンメルプフェニヒの戯曲は、「ポストドラマ演劇」時代において演劇の原点に回帰しようとする、「語りの演劇」という観点から分析される。また四番目に取り上げられるルネ・ポレシュの戯曲は、「ポストドラマ演劇」の大きな特徴であるアンチ再現性と物質性という観点から分析される。

1. ファルク・リヒターの戯曲に見られる 90 年代以降の劇作家の特徴

新野 守広

ファルク・リヒター(1969 年生まれ) のモノロールドラマ『ポートレート。イメージ。コンセプト。』(1994)を例に、90 年代以後に登場した劇作家の特徴を概観する。この戯曲は、登場人物である女性レポーターがテレビ番組の司会役として台本なしに 20 分間しゃべり続けた体験を回想しながら、客席に向かってその体験をその場で再構成するという内容である。些細な話題が一見とりとめもなく語られるなか、複製感覚の快感が強調され、映像メディアで育った世代の自画像が戯画的に描かれている。古典作家の演出からスタートしてキャリアを積んでいくのが一般的だった当時、プライベートなおしゃべりが延々と続くテキストを書き、大学の仲間の助けを借りて自分で演出したリヒターの存在は注目された。さらに彼は『ピース』(2000)でコソボ紛争におけるドイツ連邦軍の空爆を批判し、『エレクトロニック・シティ』(2003)では 9.11 を契機に強化された新自由主義を、『例外状態』(2007)では監視社会と化したコミュニティを批判している。メディア社会に育った感覚をもとに社会批判を展開する点に、マリウス・フォン・マイエンブルク、デア・ローアー、ルネ・ポレシュ、ローラント・シンメルプフェニヒ、アルミン・ペトラス(筆名フリッツ・カーター)ら 90 年代以降に登場した劇作家に共通するリヒターの特徴があることを確認したい。

2. 「テキストに存在する限り、すべては上演可能である。」

——ユルゲン・ゴッシュとローラント・シンメルプフェニヒの演劇美学

大塚 直

現代演劇を考察する上で欠かせなくなっている劇作と演出、演劇作品におけるテキスト性とパフォーマンス性との相関関係について、現在ドイツ語圏でもっとも注目を集める劇作家兼演出家ローラント・シンメルプフェニヒ(1967-)の演劇作品を軸に考察する。シンメルプフェニヒは、戯曲『アラビアの夜』(2001)の成功でブレイクするが、この作品で既にト書きとセリフが一体化しており、出演者は5名に限定されながら、筋の経過に従って様々な役柄を俳優が自己に投影して演じ分けてゆく手法が見られる。複数の登場人物・場所・筋書きが「ショート・カット」の技法でパラレルに展開される錯綜した彼の物語は、従来の「イリュージョン」型の演劇形式では、もはや表現することができない。俳優は、素の自分と作中人物の役柄という叙事的な〈二重構造〉を前提にして、複数の物語にその都度入り込んで、語りで状況説明を行うと同時に、それを即興で演じることになる。このような彼の提唱する「語りの演劇(Narratives Theater)」は、シンメルプフェニヒの戯曲を独占的に上演し続けてきた先輩演出家ユルゲン・ゴッシュ(1943-2009)の演劇美学に負うところが大きい。本発表では、永遠の〈今現在〉を「物語る」という、演劇というメディアが原理的に持っている構造とその新しい可能性について、シンメルプフェニヒの戯曲『金龍飯店』(2009)を手がかりに検証し、他の現代劇作家の作品構造と比較考察してみたい。

3. デーア・ローアー — 「ドラマ演劇」の進化形 —

三輪 玲子

リヒター、シンメルプフェニヒ、ポレシュが劇作家と演出家を兼業するのに対し、デーア・ローアー(1964-)は演劇制作の現場と一線を画して劇作家専業を貫いており、家庭内に常態化する性的虐待を描く『タトゥー』(1992)に代表される初期作品から一貫して、グロテスクとユーモアが交錯する感覚を詩的に語る話法で叙事的演劇の新しい境地を切り拓いてきた。本発表では、イラク戦争を唆喚する場面も織り込んだ『無実』(2003)を中心に、近年の『最後

の炎』(2008)、『泥棒たち』(2010)など、現代社会の片隅の小景を綴った群像劇について、舞台画像も参照しながらその特徴を確認していきたい。ローアートの戯曲は、一見、従来の「ドラマ演劇」の復権かと思ふほどの高い文学性を湛えているが、その実、現代社会を鋭く抉る描出と形式の斬新性で、「ポストドラマ演劇」にさらなる挑発的な課題を突きつけている。卑近な物語性との接点を保ちながらもリアリズムやナチュラリズムに着地することはない。即物的、叙事的に距離をとりながら、詩的、叙情的な語りで、読む者／観る者に感情移入というより感情の共有を促していく。それは「ポストドラマ演劇」時代に至った叙事的演劇の発展形を示すものとはいえないだろうか。さらに、その文学性と演劇性を一体的に追求しながら高度に詩的に現代世界を物語るローアートの演劇テキストは、「ドラマ演劇」の進化形をもって「ポストドラマ演劇」を鋭く問い直しているのではないだろうか。

4. ルネ・ポレシュのアンチ再現型の戯曲とポストドラマ演劇

高橋 慎也

現代ドイツのポストドラマ演劇を代表する劇作家・演出家としての地位を固めているルネ・ポレシュ(1962-)の戯曲は、「異性愛の白人の男性」が支配する「資本主義社会システム」批判と「再現型演劇」批判を主なテーマとしている。その中では、個人的空間と仕事空間の区別が喪失し、個人的感情が経済的搾取システムに組み込まれてゆく現代資本主義システムが、批判的に描かれている。また芸術家としての自己実現を目的とする演劇関係者が、結果として「自己実現という自己搾取」に取り込まれている演劇システムも批判的に提示されている。俳優との共同作業から生まれ、上演される場所や状況によって変更可能である彼の戯曲は、彼自身や俳優自身が直面する社会的また個人的な問題に密接に関わる自己告白としての性格を持ち、セリフの本物性と虚構性の境界を揺るがす。他方、彼の戯曲は社会学や現代思想などの著作から引用した抽象的で専門的な文章を日常会話の中に挿入することによって、個人性と一回性を越えた普遍性を確保しようとしている。専門用語が日常会話に突然引用されることによって個人的体験が社会システムとリンクし、個人的な感情と社会分析・批判とが相互にリンクしてゆく。極端に性格の異なる言葉のぶつかり合い

からは、ユーモアも生まれてくる。本発表ではポレシュの近作を例として、こうした特徴を示したい。

シンポジウムV (10:00~13:00) **B会場(12号館4階402教室)**

文形成とモダリティの相互関係

Satzaufbau und Modalität

司会：森 芳樹

モダリティという概念は、もちろん話者態度のことではあるがその逆が成り立つものでもなく、まだまだ不明なことが多い。一方で他の概念、たとえばモードとどこに区別があるのか、どういう区別があるのか、とくに日本における言語学では不問に付されることも少なくない。他方、副詞と助動詞の関係、個々の助動詞意味の分類などにおいても、単純な置き換え可能性とレッテル張りを示すことに終始し基本的な事柄も看過されることが多い。本シンポジウムでは、これらの問題が意味的な側面を持つだけでなく、統語的側面とも密接に係わっているという立場から、文構築、とくに文の周辺領域の形成とモダリティの関連を捉えることを試みる。

統語理論の内部では、規則使用による記号生成から語彙に内蔵された投射の合成、そしてこの「合成」を語彙からさらに形態素までを含んで可能にするというように、理論が許す言語の構成の自由度は増してきた。しかし Rizzi(1997), Cinque(1999)などに始まるカートグラフィ・アプローチを踏まえて、いわゆるC-領域の議論はようやく盛んになってきたといえよう。それに対し意味論・実用論の分野では絶えず文形成とモダリティにまつわる諸問題が取り上げられてきたが、文意味との関連を正確に分析できるようになったのは、動態意味論の発展と統語論における関心の深化を待ってのことだった。今回の発表の中で踏み込むことはできないが、もちろん、古き良きドイツ語言語学の伝統を看過するつもりはない。遅くともドイツでは実用論の隆盛、アメリカでは生成意味論の議論が起こるや、言語行為、直示性と話者態度の関連は言語学における中心的話題の一つとなったことは言うまでもない。

さてこのような研究状況の下、ドイツ言語学でこの問題を取り扱う意義は極めて大きい。これまでしばしば問題にされた主文と副文の語順差異にしても、意味的な側面、とくにモダリティとの関連は最近の活発な議論にもかかわらず、まだ明確にされていない。吉田発表はこの問題に焦点をあてる。同様にして関係節は一般的には、一方で関係代名詞の元位置と移動先(着地点)と他方で関係代名詞と先行詞(主名詞)の関係を統合的(意味論)もしくは連続的(統語論)に捉えることで説明されるが、城本発表ではそもそも関係節のこの統合的、連続的理解が言語依存的な理解であることを示す。名詞(句)修飾定形節—つまり連体修飾節—という観点から見ると、ドイツ語学だけでは見えてこない様々な可能性の類型論的分布が問題となる。

Kaufmann 発表では逆に不定形の名詞修飾節あるいは動詞補文節を扱う。とりわけ不定詞句が法助動詞を動詞群の中心的要素として含み、その法助動詞が不定詞に関係づけられる主名詞もしくは主文動詞から意味的な指定を受けて(その意味で剩余的に)立ち現われる場合を取り上げて、時制なども含めた明証性文脈との関連を指摘する。文法化の観点からは、時制および法形態の衰退が顕著な現代ドイツ語において、法助動詞が法形態の代入の役割を果たしている可能性に言及する。岡野&森発表では証拠性を取り上げながら、Kaufmann 発表と同じくムードとモダリティの関係性を追究する。モダリティと証拠性が意味論的に別のカテゴリーをなすことを主としてドイツ語と英語のデータを基に論じながら、モダリティを量化、証拠性を指示の関係で捉えることを提案するものである。またムードとモダリティの関係が、単に文法カテゴリーと形態の系列の問題であるだけでなく、談話構造、複文構造と文意味の相互依存的な現象であることも示される。

1. 主文機能としての動詞後置節の構造と意味 (Satzmodus) の関連

吉田 光演

生成文法等の統語理論では、ドイツ語の基底語順は SOV であり、dass 等に導かれた従属節は、補文標識 C に接続詞が生じる CP 節である。他方、主文は、定動詞移動(+時制)と節指定部への[±wh]句移動によって、動詞第2位文(V2)か動詞第1位文(V1)として派生する。V2/V1 を導く定動詞の移動と動詞の法が、平叙文([-wh])、疑問文(+wh)、命令文等の文の法(Satzmodus)と関連する、即ち命

題上位モダリティから文の法・発話行為に關与すると分析された。しかしこの分析では、”Ob er mich wohl noch kennst?”のように、動詞移動に依拠しない動詞後置節 (Verbletzt=VL)が主文機能をもつような主文現象が説明できない。

本発表では、動詞移動と文の法、force との相関を認めつつ、dass, ob 等の補文標識が主文機能を担う統語的・意味的メカニズムについて論じる。特に、ob-VL 文に焦点を絞りと、Lohnstein (2000), Truckenbrodt (2006, 2011)等の先行研究を検討することによって、(1) ob-VL 主文は上位文省略ではなく、まさに主文機能をもつこと、(2) Truckenbrodt の主張のように、話者の欲求や聞き手との共通知識(CG)の有無といった認識態度と統語的素性の相関によって、聞き手知識を前提しない自問自答の意味が生じること、(3)しかし、自問以外の要求や反語的主張等の機能の導出は、Truckenbrodt の分析でも不十分であり、心態詞を含めた、統語—意味—語用論の間の動的な分析が必要であることを論じる。

2. 日本語連体修飾節とドイツ語関係節の相違を導く機能的原理

城本 春佳

本発表で対象とするのは、日本語の連体修飾節と、ドイツ語の *Relativsatz* を含む名詞 (句) 修飾節である。「私が彼にあげた本」と「*das Buch, das ich ihm geschenkt habe*」のような構文は互いに翻訳可能であるように見える。しかし日本語の連体修飾にはこの他にも、「昨日渋谷で本を買ったおつり」や「蛙が水に飛び込む音」、「太郎が出ていこうとしたの (を呼び止めた)」のように、主名詞と修飾節の関係性を保ったままドイツ語に翻訳することは難しいと思われる構文が存在する。本発表では日本語とドイツ語の名詞 (句) 修飾節構造の翻訳可能性を検討することを通して、ドイツ語では節で名詞 (句) を修飾する場合、関係代名詞による前方照応を前提とする *Relativsatz* か、主名詞の内容を修飾節が表す *Inhaltssatz* しかないのに対し、日本語では $\lambda y \lambda x. N(x, y)$ の y に命題を取る形で連体修飾節構造ができていているという、根本的な原理の違いがあることを提案する。

3. Redundante Modalverben in finiten und infiniten Komplementsätzen von Verben und Nomen

Ingrid Kaufmann

Vor allem im gesprochenen Deutsch werden in finiten und infiniten Komplementsätzen von Verben mit modalem Bedeutungsanteil (z.B. direktive Verben wie *zwingen*, *erlauben*, *verlangen*, kausative wie *ermöglichen*, Funktionsverbgefüge wie *in der Lage sein*) und in den Attributsätzen der korrespondierenden Nominalisierungen häufig Modalverben realisiert, die die Modalität des Matrixverbs bzw. Nomens kopieren (z.B. *Meine Eltern haben mir ermöglicht, dass ich mein Studium abschließen konnte*; *Er steht unter dem Zwang, sich ständig die Hände waschen zu müssen*). Aufgrund der Redundanz dieser Modalverben werden diese Konstruktionen in normativen Grammatiken als Pleonasmen eingeordnet. Die Ergebnisse einer Korpusstudie zeigen jedoch, dass in bestimmten grammatischen Kontexten Modalverben signifikant seltener bzw. häufiger auftreten. Zu diesen Kontexten gehören Tempus und Veridikalität, die auch für Modus eine Rolle spielen. So treten bei vielen Matrixverben und -nomen im Komplementsatz signifikant häufiger Modale auf, wenn das Matrixsatztempus vorzeitig ist, und signifikant weniger, wenn der Kontext eine faktive Interpretation des Komplementsatzes ausschließt. Da das Tempus- und Modus-System im modernen Deutsch immer weiter abgebaut wird, soll in dem Referat diskutiert werden, ob das Auftreten redundanter Modalverben in Komplementsätzen damit begründet werden kann, dass die Modalverben die Funktion von Modusmarkern übernehmen. Dabei sind insbesondere Parallelen und Unterschiede bei finiten und infiniten subordinierten Sätzen von Bedeutung.

4. 量化としてのモダリティ、指示としての証拠性

岡野 伸哉, 森 芳樹

本発表では、モダリティと証拠性が意味論的に相互的に関連しながらも別のカテゴリーをなすことを、主としてドイツ語と英語のデータを基に論じ、モダリティを量化、証拠性を指示の関係で捉えることを提案する。

(認知的) モダリティと (推論的) 証拠性については、従来よりそのカテゴリー上の地位をめぐってさまざまな見解が存在する (Faller2002)。前者が後者を包含するという立場は Palmer(1986)に、後者が前者を包含するという立場は Chafe(1986)に代表されるが、本発表は de Haan(1999)をはじめとする、両者を明確に区別する立場を採ることになる。

関連するデータとして、Papafragou(2006)の挙げる法助動詞の条件節への埋め込み等のテスト、ドイツ語と英語の法助動詞 (ならびそれに類する表現) における補文節での未来指示の可否、条件節の Korrelat の出現可能性が主たるものとして挙げられる。Papafragou の言及するテストは Lyons(1977)の言う法助動詞の主観的用法／客観的用法を区別するために提唱されてきたものだが、本発表では前者は「今・ここ・私」という指標性に結びつけられる。英語において顕著な未来指示への制限は、この指標性に関連づけて論じられる。

理論的には、Kratzer(1976)以来量化に基づく意味論で捉えられてきた法助動詞の一部を、個体指示に基づく意味論で捉えなおすことになる。具体的には、条件節を定冠詞と同様の確定記述として捉える Schlenker(2004)の理論を用い、証拠性表現のとり補文を隠在的な推論における前件 (証拠) からの帰結として捉えることを提案する。

口頭発表：文学2／文化社会 (10:00～12:35) D会場 (12号館3階301教室)

司会：浅見 昇吾, 桑田 文

1. 都市と人間 — デープリン『ベルリン・アレキサンダー広場』について

時田 郁子

デープリンは『ベルリン・アレキサンダー広場 フランツ・ビーバーコップフの物語』(1929年)において「新しい人間」の誕生を描いた。「新しい人間 (der neue Mensch)」はドイツ・モデルネの重要モチーフの一つであり、既存の諸価値を破壊して新しい世界を作り出す人間を意味する。デープリンは作品の冒頭で、この物語の中で主人公のビーバーコップフが「打撃」を受けてはそのたびに立ち上がることになると記している。ビーバーコップフは、アレキサンダー広場限界を活動の場に、友人と思った人物たちから三度裏切られ、

最終的に生まれ変わって「新しい人間」になる。1920年代後半にアレキサンダー広場界限で都市計画に基づく工事が行われていた事実を考慮すると、地下を掘り返し改めて街の基礎を築く作業は、ビーバーコップフが「新しい人間」になる過程と連動すると考えられる。本発表では、地上と地下、垂直と水平、光と闇といった対照的な表現に着目し、デープリンがモンタージュの手法で挿入するエピソードを参照しながら、彼の「新しい人間」像を輪郭づけ、その意義を探る。ベルリンの改造と主人公の変身を再生と捉えるならば、両者は自然の循環に則っていると言えるだろう。これまでデープリンの人間観と世界観は作家本人の哲学的エッセイに基づいて解釈されてきたが、本発表では「新しい人間」の観点から彼の自然哲学の一端を照らし出すことになる。

2. 東ドイツ史の終焉・物語の迷走・記憶の連鎖

－『ある古い走行録』（グリューンバイン）を手がかりに

宮崎 麻子

東ドイツ崩壊後の文脈には、ひとつの国の歴史が終了したという歴史意識とともに、それまで支配的だった歴史のナラティブが効力を失うという事態が現れる。そこでは終了した歴史はどのように想起されるのだろうか。この事態を捉えたテキストとしてD.グリューンバインの散文『ある古い走行録』を手がかりに、歴史の空隙における想起の形式について考察したい。このテキストでは旧ソ連軍の戦車が目的なく迷走するイメージが語られる。これは迷走的な語りの自己言及的な比喩となっている。この語りは、東ドイツにおける歴史の言説と対照的な形式をもっている。社会主義の進歩を掲げた公式の歴史とだけではない。それに対する失望や懐疑をみせる1980年頃の文学も、ひとつの歴史の内部に囚われているのを嘆きながら目的論的な語りの形式を再生産していた。グリューンバインのテキストではそうした1980年代の作品群（V. ブラウン『鉄の車』など）の引用が現れつつ、後者が囚われていた物語の形式からの脱却が演じられる。革命政権を正当化してきた目的論的物語が放棄されることで、革命の暴力を正当化しない形での想起が誘発される。ここに見出せるのは、東ドイツにおけるソ連の戦車という形象に十月革命やフランス革命の暴力の記憶も重なってくるような、累積的・多層的な歴史の想起である。その多層性は、様々な先行テキストの形象が断片的に引用されることで成立している。

3. 〈労働〉のメタモルフォーゼ

——アレクサンダー・クルーゲの「対抗公共圏」論をめぐる

竹峰 義和

映像作家・社会思想家のアレクサンダー・クルーゲ（1932-）は、理論的主著である『公共圏と経験』（オスカー・ネクトとの共著、1972）で、メディア産業が供給する「疑似経験」によって大衆が公共的表象のネットワークから排除されていると批判したうえで、そのような現状を打破するためには、想像力や知覚といった「経験」にまつわる諸契機を回復させる「対抗公共圏」を組織することが必要であると主張した。さらに、続編にあたる『歴史と我意』（ネクトとの共著、1981）では、マルクスに由来する「労働」の概念を、歴史学・生物学・人類学・文学・メディア論などの領域を横断するかたちでラディカルに拡張するとともに、社会的・歴史的に分断されてきた大衆の「労働能力」の数々をたがいに結合させ、転覆的にモンタージュすることで、社会的経験の地平を新たに再編成することの必要を訴えている。本発表では、「対抗公共圏」という鍵概念に集約されるアレクサンダー・クルーゲの社会理論の変遷の軌跡を、『歴史と我意』で浮上する「労働」という問題系に焦点をあてつつ再構成することで、①生産機構のラディカルな変革を志向していたクルーゲが、1980年代以降、広義における大衆の「労働能力 Arbeitsvermögen」の再組織化という契機を重視する方向にシフトしていったこと ②そのための具体的実践として、モンタージュという手法が戦略的に活用されていること、の2点を示したい。

4. ガンゼル『ウェイブ』試論

— 教室の日常にひそむファシズム —

木本 伸

本発表は2008年公開のドイツ映画『ウェイブ』(Die Welle)の作品解釈を行う。主人公のライナーは高校教師。彼は1週間のプロジェクト学習で独裁制を担当することになる。独裁は現代では起こりえないと主張する生徒たちに対して、彼は教室を模擬的な独裁空間とし、生徒自身に専制的な政治状況を体験させる。プロジェクトはウェイブと命名され、独自の敬礼や制服が定められる。そのメンバーは次第に集団に帰属する喜びを覚え、それと並行してグループの外部に

対する排他的な言動を示すようになる。この暴走を察知した主人公は学校の講堂にメンバーを集めて、ウェイブの解散を宣言する。ところが「ウェイブは僕の命だ」と主張する生徒の反乱により、この集会は流血の事態に至り、彼は首謀者として警察に連行されていく。この作品にはモデルがある。1967年にアメリカ・カリフォルニア州の高校で行なわれた「第三の波」という名の教室実験である。この実験は高校教師の手記をもとに小説化され、特にドイツでは授業の教材として広く受け入れられてきた。そのため映画館の切符売り場には教師に引率された生徒たちの姿が目立ったという。こうした背景から、ドイツの批評は不可避免的に映画と小説の比較に目を奪われるものが多かった。これに対して本発表では、この映画が原作小説の舞台設定を受け継ぎつつも、現代の若者風俗を特徴的に描き出すことで、消費社会の無気力と個人主義が全体主義へと転化する可能性を映像化しており、ここに本作品のアクチュアリティが存することを示したい。

口頭発表：文学3（10:00～12:35） **E会場（12号館2階201教室）**

司会：中村 朝子, 岩崎 大輔

1. ティークの鉱山実体験と『ルーネンベルク』解釈

—主人公の最後の形姿を巡って—

山縣 光晶

ルートヴィヒ・ティークは、『ルーネンベルク』(Der Runenberg, 1802) 成立に先立つ1793年に、当時有数の鉱山地帯であったフランケンヴァルト山地をヴァッケンローダーと旅し、その中心の一つナイラを訪れ、近郊の鉱山縦坑の中で鉱業と鉱山内の神秘的ともいえる世界を実地体験する。しかし、これに言及して『ルーネンベルク』を論考した先行研究は見られない。

本発表は、ティークらの旅行記に描かれるその鉱山体験や、1454年に遡るナイラの紋章に描かれた鉱山・鉱業のシンボルである人物 Wilder Mann 像と、テキスト最後の野趣溢れる形姿の主人公像との類似性を論拠に、『ルーネンベルク』の構想の基底にはシュテフェンスらの影響だけではないティーク自身の現実の鉱山体験が反映されていること等を論証することで、想像上の観念的な鉱

山・鉱物の世界すなわち非現実のメルヘン世界への主人公の同化とその評価を基調とする従来の研究とは異なる解釈の必要性を指摘する。

ティークが体験した鉱業・鉱山世界は、多くの先行研究にあるが如き狂気や悲劇の世界ではなく、農業などの平地の営みと対等の確固とした人間の営みの世界である。とすれば、ティークが描く主人公は、そこに人間の生の別な可能性を見出したと考えることもできよう。この点に着目しつつ、作品全体を一貫して流れる *Einsamkeit* のモチーフに視点をあててテキストにおける場と主人公の生を考察し、主人公はメルヘン的異界に去るのではなく、*Einsamkeit* のうちに真の自分のあり方・生き方を求めて永遠不変の存在のメタファである鉱物や鉱山に具象される新しい生の次元へと旅立つという解釈を試みる。

2. 不可知のものへの試み

マイリンクの初期短編における近代解剖学と錬金術

中岡 翔子

本発表では、グスタフ・マイリンク（1868-1932）の初期風刺的短編小説『ブレパレート』（1903）と『蠟人形館』（1907）について考察する。先行研究においてこの二つの短編は、近代科学を批判するものとみなされている。しかし両作品に描かれた科学は、近代科学というよりも錬金術との類似を示している。とりわけ錬金術を想起させるのは、両作品に登場する解剖学者モハメド・ダラシェコーの西欧と非西欧、近代と前近代という二面性である。ダラシェコーは西洋の高名な解剖学者である一方東洋人であり、また彼の錬金術的、魔術的な蒐集品は、トルクメニスタン、キルギス、エジプト、アフリカ、インドに起源を持っている。この西洋と東洋の二面性は、生命とは何かを探求するダラシェコーの解剖学実験にも影響を与えている。またマイリンクと親交のあったマックス・プロートは、マイリンクが風刺作品の中で「ルネサンス式の復讐」を企てていることを指摘している。そこで本発表では、歴史的な一区分としての近代科学を離れ、地理的にはオリエントに起源を持ち、時代的にはルネサンスにさかのぼる錬金術を糸口としてダラシェコーの実験の意図を考察する。マイリンク自身ブラハで錬金術の研究を行っているが、その際彼は神が人間には不可知のものであるという一定の結論に達している。こうしたマイリンクの神に対

する視点に立ちながらダラシェコーの解剖学実験の神秘主義的な様相を明らかにすることが、本発表の目的である。

3. 18世紀末ドイツ文学における「ウラーニア」モチーフ

ー ハインゼ、シラー、ヘルダーリン

志村 哲也

ヘルダーリンのシラーからの影響は従来知られているが、もう一人の「尊師」であり、ヴェストファーレンへの旅を共にした小説家ヴィルヘルム・ハインゼ(1746-1803)からの影響もそれに劣らぬものである。一例として抒情詩「調和女神賛歌」(1792)では、ハインゼの主著である長編小説『アルディングェッロ』(1787)から、ギリシア神話の愛と美の女神アフロディテ(ウェヌス)の異名の一つであり、万物を繋ぎ止める原初の力の神格化たる「ウラーニア」モチーフを引用している。しかしそれはシラーも多用しているモチーフであり、その詩作品中最も有名な「歓喜に寄す」(1785)においても意外な形で登場しており、そこにもまた少なからずハインゼの処女小説『ライディオーン』(1774)からの影響が認められる。「ウラーニア」をキーワードに三者の作品を比較することでその影響関係が浮き彫りとなり、特にシラーもまた従来ヴィーラントの影響と言われていた「ギリシア熱」を、その弟子ハインゼにも負っていることが見えてくる。また『ヒュペリオン』第一部(1797)において、ハインゼの唯物論・汎神論とシラーの超越論・理神論という、一見相反する世界観の融和こそがヘルダーリンの目指していたものであるという解釈が可能となる。没後200周年を機にその膨大な手記『フランクフルト遺稿』が全て活字化されて以来、再び注目を集めつつあるハインゼの、18世紀末ドイツ文学における大きな「触媒」としての役割をここに再確認する。

4. キリストの表象と詩の断片化

ー ヘルダーリンの後期讃歌『パトモス』の改稿について

畠山 寛

ヘルダーリンにとって、キリストは歌うべくして容易には歌いえない存在であった。讃歌『パトモス』は、ホンブルクの方伯に献呈された後、数度手が加

えられている。それはなぜか。改稿態のすべてが完全な形で残されているわけではないが、改稿過程を追うと、たんに個々の語の変更だけではなく、主にキリストを描く箇所での微妙かつ根本的な変化を確認することができる。改稿によって、キリストを歌うパースペクティブが変化し、それに伴ってシンタックスの破格化が進み、円滑ならざる結合が生まれ、語は孤立の度を強めていく。ヘルダーリンが、キリストという最も重要な神的存在を描くための言葉を模索していたことは明らかである。換言すれば、ヘルダーリンは文法的秩序の破壊によって新しい「意味」を創出しようとしているのである。その新しい「意味」は、ヘルダーリンの詩学的省察の実践でもある改稿において、キリストの死という悲劇的事象によるニヒリズムの超克として現れている。ヘルダーリンは死に向かうキリストにおける生の肯定を焦点化して歌い、最後の神的存在が地上から姿を消すその瞬間に生じるニヒリズムが、まさに死それ自体によって乗り越えられうることを示している。

この発表では、後期ヘルダーリンの文体と表現対象との関係を明らかにしたうえで、『パトモス』の断片化をもたらしているものが、ヘルダーリンの悲劇観と密接に関わっていることを明らかにする。なお、本発表では、断片化と狂気の関係について立ち入ることはできない。それは、後期ヘルダーリンの全体像を明らかにすることも含め、今後の課題としたい。

ブース発表4 (10:00~11:30) **H会場 (7号館4階0413教室)**

(ブース発表は途中での出入り自由です。)

Fehler als Indikatoren für Fortgeschrittenheit? - Eine Untersuchung zu Wortstellungs- und Artikelfehlern in Texten japanischer Deutschlerner.

Makiko Hoshii, Angela Lipsky

In dieser Kabinenpräsentation möchten die Referentinnen Zwischenergebnisse ihres JSPS-Projekts (Projektlaufzeit 2011-2013) „Erwerb der Wortstellung und des Artikelgebrauchs bei japanischen Deutschlernern und die Rolle der Fehlerkorrektur“ vorstellen.

Die Wortstellung und der Gebrauch der verschiedenen Artikel (Definit-, Indefinit- und Nullartikel) gelten allgemein als Bereiche der deutschen Grammatik, die auch fortgeschritteneren Lernern noch Schwierigkeiten bereiten. Unsere Analysen von schriftlichen Produktionen japanischer Deutschlerner zeigen allerdings, dass nicht alle Aspekte dieser zwei Bereiche dauerhaft Lernschwierigkeiten darstellen, da sich die Lernaltersprachen je nach Niveaustufe hinsichtlich der Fehlerhäufigkeit und der Fehlertypen deutlich unterscheiden.

Im Bereich der Wortstellung werden wir besonders auf die Frage nach dem Erwerb der Verbzweitregel und der Realisierung des Vorfelds je nach Sprachniveau eingehen. In Bezug auf die Artikelsetzung soll gezeigt werden, dass das Auftreten von Fehlern bei fortgeschritteneren Lernern auf ganz bestimmte Umgebungen beschränkt ist, die Grundprinzipien der Unterscheidung von Definit-, Indefinit- und Nullartikel jedoch gut erworben sind. Wir werden argumentieren, dass die typischen Artikelfehler fortgeschrittenerer Lerner, ebenso wie die typischen „Vorfeldfehler“, als Konsequenz komplexer werdender Satz-, Text- und Wortschatzstrukturen zu sehen sind und deshalb eine notwendige Phase in der Entwicklung der Lernaltersprache darstellen.

ブース発表5 (11:30~13:00) **I会場 (7号館4階0415教室)**

(ブース発表は途中での出入り自由です。)

ドイツ語の発音学習教材について

ー ステップバイステップの学習のために

中川 純子

本発表では、発音の導入および、語レベルの発音学習に焦点を絞って、発音教材の試作を提示するとともに、発音教育についての議論を求める。

一般に発音が教科書の中で扱われるのは冒頭の2~3ページである。ほとんどの場合そこには注意を要する綴り字と音の関係が示され、その綴り字を含む単語が並んでいる。しかし、それらは練習のためというよりは単語の例示であり、最初の母音の提示に、未習の子音の音が含まれる単語が挙がるなど、ゼロレベルの学習者が積み上げ式に練習するというような配慮はみられない。また

復習や確認には CD がほとんど唯一の拠り所となる。しかし聞いただけの音を習得し発音できるようになるにも年齢的に臨界期があると言われ、臨界期を過ぎると母語にない音を弁別することも難しくなる。このようにほとんど形だけにも見える発音導入のページを実践的なものにしたと考えたのが本発表で紹介する取り組みの出発点である。

第二言語の発音習得の先行研究に学びながら以下のコンセプトのもとに教材の作成に取り組んだ。

- 発音の仕組みを具体的に自分の音声器官を使って理解する。
- 無意識に出している母語(日本語)の音を自覚し、外国語の発音獲得に生かす。
- モデル音を真似るのではなく、自分で音を発見する。

まだ検討過程であるが、ゼロレベルから使え、学習のどの段階でも拠り所となるもの、独習できるもの、をめぐして、改訂を重ねながら授業で使用している。本発表によって、発音学習教材のあり方について、広く議論を求めたい。